



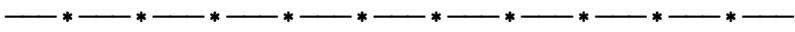
Data

監督・脚本：原田真人
 原作：井上靖『わが母の記～花の下・月の光・雪の面』
 出演：役所広司／樹木希林／宮崎あおい／南果歩／キムラ緑子
 ／ミムラ／菊池亜希子／三浦貴大／真野恵里菜／赤間麻里子／三國連太郎／小宮孝泰

👁️👁️ みどころ

1960年代の井上靖文学からは『敦煌』（88年）をはじめ『天平の甕』（80年）、『おろしや国酔夢譚』（92年）等々の名作が生まれたが、1970年代（晩年）の『わが母の記』は？たしかに、樹木希林、役所広司、宮崎あおいという3世代を結ぶ名優の共演が光るし、泣かせどころもつぼを押さえているが、こんな物語は昭和の良き時代なればこそ・・・？

ちなみに、社会派の旗手・原田真人監督が井上文学にチャレンジするのなら、万国共通の「人情モノ」より、もっと別の素材があったのでは・・・？



■□■時代的にはタイムリーだが、私見では・・・？■□■

少子高齢化が進み、アルツハイマー病や認知症に対する国民の関心が高まっている今、原田真人監督は数ある井上靖文学の中から晩年に書かれた『わが母の記～花の下・月の光・雪の面』に注目したが、その是非は？

私の邦画のベスト1はダントツで『砂の器』（74年）だが、第2位は井上靖の原作を佐藤純彌監督が映画化し、西田敏行が主演した『敦煌』（88年）。井上文学の映画化は多い。近時の『茶々～天涯の貴妃（おんな）』（07年）は少しマンガ的だった（『シネマルーム18』178頁参照）が、『天平の甕』（80年）、『千利休 本覺坊遺文』（89年）、『おろしや国酔夢譚』（92年）などはそれぞれ重厚ですばらしい出来だった。しかし、『わが母の記～花の下・月の光・雪の面』は井上靖の自叙伝的小説だから、それなりの「見せどころ」や「泣かせどころ」はあるとしても、歴史的躍動感や登場人物たちのダイナミック性はないはず。モントリオール世界映画祭で審査員特別グランプリを受賞したことにケチをつけるつもりはないし、時代的にはタイムリーだが、『金融腐蝕列島 [呪縛]』（99年）や『突

入せよ！「あさま山荘」事件』（02年）『シネマルーム2』204頁参照）などの社会問題作づくりに定評のある原田真人監督が井上文学にチャレンジするのなら、もっと別の選択肢があったのでは・・・。

■この家族模様は、昭和の良き時代なればこそ・・・■

映画は冒頭の1シーンだけ、主人公・伊上洪作（役所広司）が子供の頃の記憶を観客に示した後、昭和34（1959）年、昭和35（1960）年、昭和38（1963）年、昭和41（1966）年、昭和44（1969）年と時期を追って、父親・隼人（三國連太郎）の死亡後、認知症の進行とともに次第に扱いにくくなっていく母親・八重（樹木希林）（の扶養）をめぐる伊上家の家族たちの様子を描き出していく。洪作は成功を収めた小説家として、東京で妻・美津（赤間麻里子）と3人の娘と共にかなり贅沢な暮らしをしているようだ。

八重の面倒を見るのは、伊豆の湯ヶ島の実家に夫と共に住んでいる長女の志賀子（キムラ緑子）。自称・古美術商と称している二女・桑子（南果歩）は何やかやと理屈をつけては値の張りそうな小道具を実家の蔵から持ち出しているが、それがトラブルの種にならないのは洪作も志賀子もそれぞれ豊かな生活があるため・・・？洪作の悩みの種は、自分の長女の郁子（ミムラ）はしっかり者だが二女の紀子（菊池亜希子）が病弱なこと。もっともその分、今は写真家を目指して努力している三女の琴子（宮崎あおい）が元気いっぱい。ワンマンおやじの洪作に対して多少なりとも自己主張できるのは、この琴子くらいだが・・・。

■この描き方も、高度経済成長期なればこそ・・・■

スクリーン上に昭和〇〇年と表示されるとつい自分のこれまでの人生と対比してしまうが、本作に描かれる昭和30年代は私の中学高校時代であると同時に昭和日本の高度経済成長期。私の中学高校時代はそれなりに貧しい環境下で生活しながら、井上靖の小説を読んでいたが、当の本人（伊上洪作）はこんなリッチな生活をしていたの？検印のために一家総出で作業する姿や締め切り原稿を取りに来た担当者を待たせる姿、さらに運転手兼秘書として瀬川（三浦貴大）を突然家に連れてきて、「雇用条件は適当に決めてくれ」と妻の美津に言い残す姿などを見ていると、一流作家だからこれくらいは当たり前と思う反面、いくらシネマ本を出版しても売れなかった私の「ひがみ根性」からは少し反発も・・・。

昭和30年代の伊上家ではトラブルメーカーになる1人の老人（の扶養）をめぐる家族の姿が自叙伝的小説になったわけだが、平成20年代の今ではこんな（大）家族はほとんど存在しないうえ、老人問題はもっと深刻だから、深刻さの中にもほのぼのとした家族愛に満ちた本作のようなストーリーを描くのは無理。『デン德拉』（11年）（『シネマルーム27』187頁参照）の世界は想定外にしても、あと10～20年もすれば、事実上昔の「姥捨て山」の制度が復活しているのでは・・・？

■今ドキこんな孫娘は・・・？■

NHK大河ドラマ『篤姫』では少女時代から晩年までを1人で演じきった宮崎あおいだから、本作でセーラー服時代に始まり、瀬川に逆プロポーズしたり、軽井沢の別荘で気丈に八重の世話をするしっかり者の孫娘を演ずることなどチョロイもの。名優の樹木希林と役所広司を向こうに回しては、いくら若手演技派NO. 1の宮崎あおいでもそうはいかないだろうが、微妙に父親に反抗する末娘、手を焼きながらも八重の世話役をどこか楽しそうに受け入れる孫娘、そして後に文学賞を受賞し立派に作家の仲間入りをする瀬川の尻叩き妻など多種多様な顔を、年代に応じて見事に演じ分けている。もっとも、父親の代わりに(?) 軽井沢の別荘にこもって八重の世話をするというのは年頃の娘にとって大きな負担だし、そんなことをしていれば女流カメラマンという本来の目標の達成はどうなるの？

他方、昭和30年代という時代の中で、伊上家は八重の誕生パーティーに親戚一同が川奈ホテルに泊まり込むというリッチぶりだし、琴子の着ているファッションも一見して高級品とわかるものばかりだから、昭和46年に大学を卒業するまで貧乏生活に慣れていた私の目には若干上流階級のお嬢サマに対する反発も……。洪作は琴子にとって目の上のタンコブ的頑固おやじだったはずだが、それでも適度な反発だけで順調に育ち、かつ祖母の面倒をここまで見る事ができたのはやはり育ちがいいから？それとも、時代のなせるワザ？平成20年代の今では、いくら上流階級のお嬢サマでも、祖母の世話をするため別荘地でベッタリ一緒に暮らしてもいいよなどという孫娘は、どこを探してもいないのでは……？

■□■母親に捨てられたの？それとも……。？■□■

洪作は伊上家の長男で跡取り息子のはずだが、幼少の時に両親に捨てられ曾祖父の妾と共に伊豆の土蔵の中で育ったという記憶をひきずって生きてきたため、父・隼人と母・八重に対する反発が強いらしい。隼人の死後も八重とそれをめぐって時々やりあっていたが、認知症の進行とともにその「論争」が成り立たなくなると、洪作の「戦意」が急速に衰えていったのは当然。しかし、八重の頭の中に残っている洪作の記憶とは？都合のいいことだけを記憶し、都合の悪いことを忘れてしまえば人間は気楽なものだが、日々戦場にある働き盛りの時代はそうはいかないのが常。しかし、八重くらいの年になり、子供たちから世話してもらえる身分になれば……。

名優・役所広司と名優・樹木希林が切り結ぶ本作の泣かせどころは2つある。その1つは、洪作だけ家族から切り離れたのは決して洪作を捨てたのではなく、家族に何かあっても1人だけは生き残らせるためだったと明かされた時。もう1つは小学生の時に洪作が校庭で書いた詩を、本人ですら忘れていたのに認知症が進んでいるはずの八重がスラスラと誦じたこと。八重の脳の中には洪作のそんな一断片だけは鮮明に残っているわけだ。年若い母親と世間的に大成功を収めた大作家とのこんなエピソードは、国こそ違っても万国共通に理解できるお話。そんな泣かせどころを2人の名優の名演でうまく演出したことが、モントリオール世界映画祭で本作が絶賛された要因だろう。

2012(平成24)年5月10日記